

奈良文化財研究所 特別企画展

# 地下の正倉院展

二条大路木簡の世界



## ごあいさつ

一九八八年秋、長屋王家木簡の発見の興奮もまだ冷めやらぬ頃、長屋王邸北側の当初二条大路南側溝と考えた溝状の遺構から、次々と木簡が見つかり始めました。後に両端の閉じた溝状の遺構であることとともに、同様の遺構が二条大路の北側にもあったことがわかり、長屋王家木簡の二倍以上にも及ぶ、まさに空前絶後の量の木簡が出土することになります。二条大路木簡と名付けられた木簡群の発見です。

内容の解明は困難を極めました。光明皇后の皇后宮に関わる木簡で、長屋王邸跡地が七四〇年の恭仁遷都までの一時期に皇后宮になったのではないかと、ある意味衝撃的な成果も明らかになりました。また、二条大路を挟んだ北側の東院南方遺跡の一郭に、不比等の四男藤原麻呂の宅地があり、その家政機関が皇后宮の活動を支えていた様子もわかってきています。

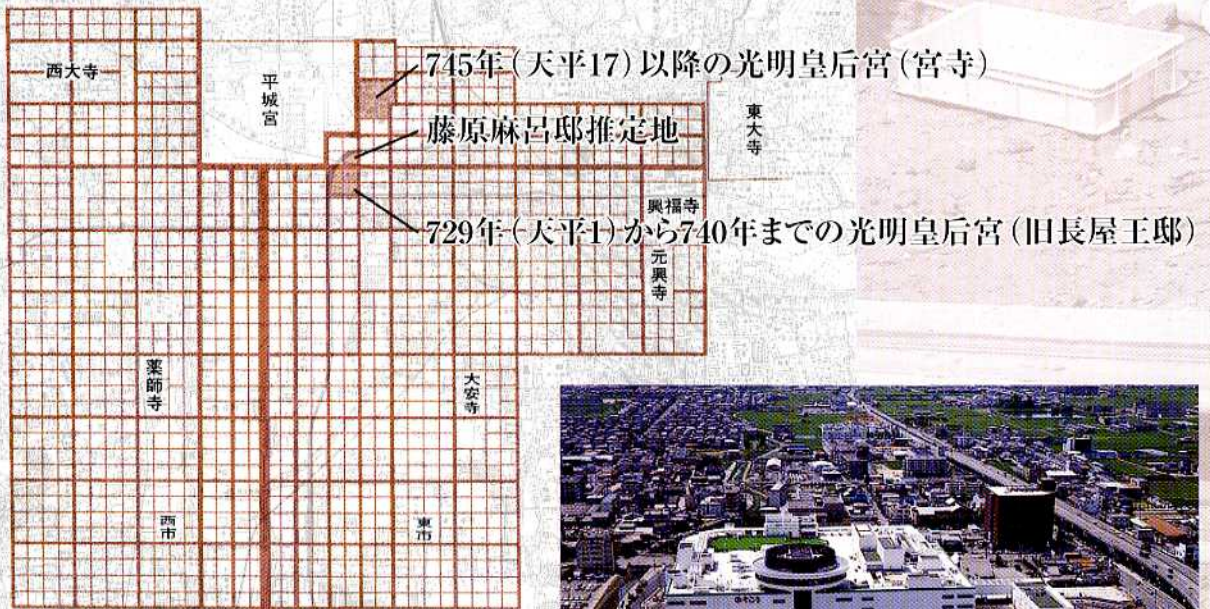
地下の正倉院展も今年で三年目を迎えます。実物の木簡をご覧いただく機会として定着した感がありますが、今後とも変わらぬご支援をたまわればと存じます。

終わりに、今回の展示の開催にあたり、ご後援をいただいた読売新聞大阪本社に対し、あつくお礼を申し上げます。

二〇〇九年十月

独立行政法人国立文化財機構  
奈良文化財研究所長

田辺 征夫



光明皇后宮と藤原麻呂邸位置図



発掘調査中の藤原麻呂邸(手前)と光明皇后宮(中央)の故地(1989年撮影)

### 例言

一、このリーフレットは、奈良文化財研究所ガイダンスコーナーで行う特別企画展「地下の正倉院展 二条大路木簡の世界」にちなんで編集したものである。(会期二〇〇九年十月二十日(火)―十一月二十九日(日))

二、木簡の保存に万全を期するため、会期中二週間ごとに二回の展示替えを行う。

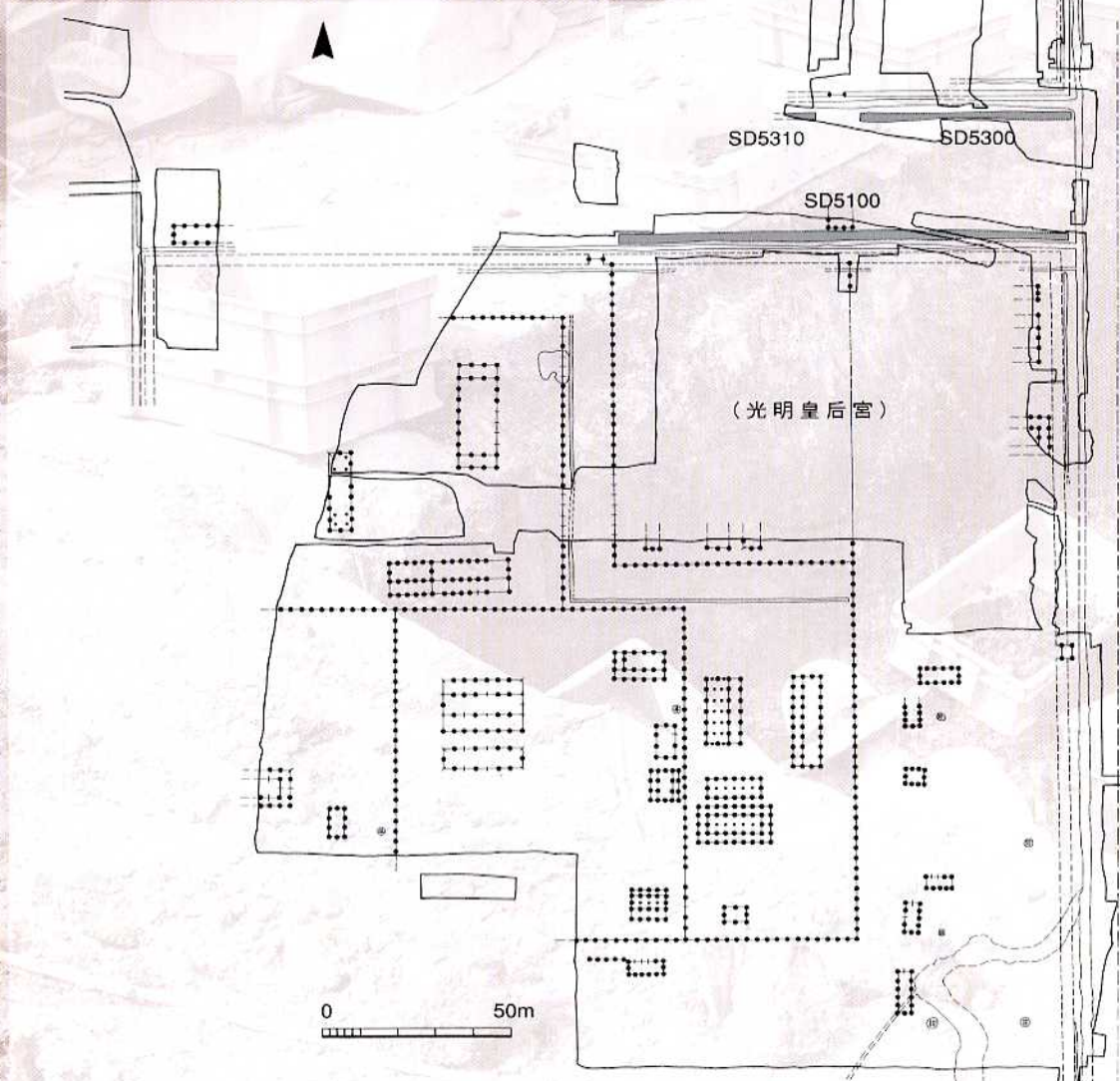
## 二条大路木簡

二条大路木簡は、平城京跡左京三条二坊八坪と二条二坊五坪の間の、二条大路の路面上に掘られた東西に長い濠状遺構から出土した木簡群で、総計七万四千点に上る。

二条大路木簡は、長屋王家木簡と二連の調査で見つかったため、混同されることが多いが、性格も時期も全く異なる。長屋王家木簡が、宅地内の遺構から出土した、一貴族の家政機関という閉じた世界の、平城遷都まもなくの時期の遺物であるのに対し、二条大路木簡は、路面上という特異な場所の遺物で、内容も平城宮木簡と全く変わりのない公的な色彩が強いため、時期も長屋王没後の七三六年前後が中心である。

廃棄元の特定は容易ではないが、木簡の内容分析から、基本的には三条二坊の長屋王邸跡地に置かれた光明皇后の皇后宮に関する遺物で、その警備を担当した左右兵衛府や中衛府の木簡を主体とすることがわかっている。加えて、当時兵部卿、左右京大夫だった藤原麻呂の家政機関に関わる一群が含まれ、その出土位置から二条二坊五坪に麻呂邸を想定する根拠にもなっている。また、「続日本紀」に見える七三六年六月から七月にかけての吉野行幸に関わる遺物も含まれる。

これら複数の内容の木簡の関連性や廃棄の契機など、なお充分には解明されていない部分も多いが、今回の展示により二条大路木簡の大きな広がりを実感していただければ幸いである。



二条大路木簡当時の光明皇后宮(二条大路南側)と藤原麻呂邸(二条大路北側)の遺構

三、木簡の写真は、特に明記したもの以外は、原寸の八パーセントに縮小して掲載した。写真下のアラビア数字は今回の展示における通し番号、Nは二条大路北側のSD五三〇〇またはSD五三一〇、Sは二条大路南側のSD五一〇〇の遺物であることを示す。

四、本書の編集は、企画調整部の杉山洋・渡邊淳子の協力のもと、都城発掘調査部史料研究室が担当し、渡辺晃宏が執筆した。木簡の写真は、企画調整部写真室の中村一郎が撮影した。

# 皇后宮と吉野行幸

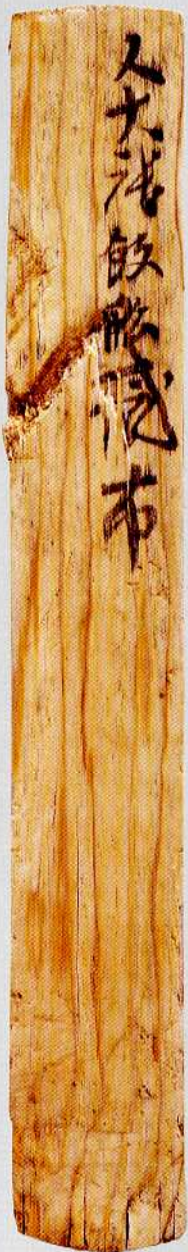
七二九年(天平一)、聖武天皇の皇后になった光明子は、長屋王邸跡地に敷地をたまわり、七四〇年の恭仁遷都までの間、ここに皇后宮を営む。七三六年七月、天然痘退散祈願も兼ねて吉野に行幸した聖武天皇は、その帰途皇后宮で数日を過ごす。



8



9s



- 8は、皇后宮の東を南北に通る東二坊坊間路の西側溝から見つかった木簡。二条大路木簡ではないが、皇后宮と密接に関わる木簡なので、合わせて展示する。中衛府の官人が厨(くひや)に薬(?)を請求した木簡。光明子が皇后になったことが官人に周知された八月二十四日の直前の日付で、国に返還された旧長屋王邸を警備する軍隊に関わるものだろう。あるいは、既に皇后宮としての整備が始まっていたのかも知れない。
- 9は、天皇の輿(こし)の天蓋(てんがい)や長柄(ながえ)の袋のことが書かれた木簡。内匠寮に関わる木簡とみられ、行幸の調度の準備に関連するものかも知れない。
- 2は、七三六年(天平八)六月二十七日から七月十三日にかけての吉野(芳野)離宮への行幸後、使用しなかった貫簀(ぬきす)(手洗い用のすのこ)に付けた整理用の付札。使用済みの貫簀に付けた木簡も見つかっている。
- 4も貫簀の付札。上部に孔をあけて紐を通す形態で、2と日付が近いことから、これも吉野行幸に関連する可能性が高い。
- 10は、吉野行幸の際の食料調達用の銭の残りに付けた木簡。少進(しうじゆ)がみえるので、大膳職のものか。



(×0.7)

10s

2s

4N

その後使用記録が順次書き込まれ、  
 鮭や鴨の購入や網曳司（和泉国にあつた内膳司の御厨）への派遣などの記載が注目される。

6は、文書箱の蓋を一週間分の油の使用記録に再利用したもの。同時に出土した木簡の多くが七三六年のものであること、天子大坐所（聖武天皇の居所）と別に大殿がみえ、しかも「七月内」とあることから、吉野行幸への帰途、聖武天皇が皇后宮に立ち寄った際のものと推測される。行幸期間が

異例に長いのもそのためとみられる。聖武天皇の側妻とみられる「文基」が同行しているのも注目される。

裏面に天地逆に記された文言は、山陽道を伝わって都に伝染し始めた天然痘の退散を祈願する呪句とみられる。1は、宮人が見えることから、皇后宮の何らかの業務に奉仕した人員を書き上げた木簡であろう。



# 藤原麻呂邸の家政

藤原麻呂邸では、聖武天皇の母、中宮宮子の中宮職から出向した者も含め、多数の従者が活動していた。後に正倉院文書で活躍が知られる者もあり、麻呂没後の従者の処遇を窺わせる。邸内の勤務分担や、食料支給の記録の木簡が多く残るほか、皇后宮の運営を支える役割も果たした様子が読み取れる。



21s



16N



標本三宮進上水葱種事 今廿四日 宣銭廿八文

宣別銭二文未請 去年八月青木宮係奉進上具あり

宣別銭二文未請 宣別銭二文未請

宣別銭二文未請 宣別銭二文未請

宣別銭二文未請 宣別銭二文未請

宣別銭二文未請 宣別銭二文未請

(×0.7)

31N

(×0.7)

29N

(×0.7)

22N

21は当時藤原麻呂が長官(卿)だった兵部省の召文。皇后宮を守る兵衛に關わるもの。16は麻呂邸の宿直(夜勤が「宿」、昼勤が「直」)を担当した資人(従者)を書き上げた木簡。「大殿」は藤原麻呂の起居した建物を指す。

22・29・31は各所から麻呂邸に届けられた物品の進上状。22は水葱の種、29は灰、31は瓜を進上する。

22と31では代価が支払われている。標本三宅と岡本宅は皇后宮との関係が知られており、皇后宮との関わりで麻呂邸に届けられている可能性もある。

18と33は近江国坂田郡上坂田郷(現在の滋賀県長浜市東上坂町・西上坂町)からの米の荷札。同郷の荷札がまとまって出土しており、藤原麻呂の封戸の存在を示すか。





78N



77N

麻呂邸の根拠  
 差出と宛先の書かれた木簡は、木簡群の性格を考える大事な史料になる。77の「兵部省卿宅政所」の木簡の発見によって初めて、二条大路木簡の中で皇后宮の活動を支える家政機関が、藤原麻呂のものであることがわかった。この木簡に見える人々は、麻呂邸に出向する中宮舎人であることが78からわかり、彼らの名が見える多数の木簡をたどっていくと、麻呂の家政機関の活動が浮かび上がってくる。



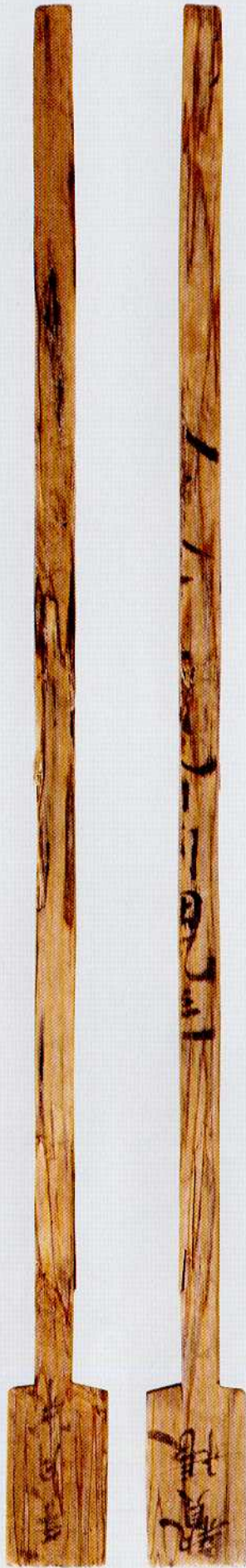
18N



33N

贄帳の題籤軸に二次加工された木簡―皇后宮と藤原麻呂邸の接点

74の七三六年（天平八）八月から翌年七月までの贄の出納に関わる帳簿のものとみられる題籤軸の軸部分をよく見ると、天地逆さまに文字の右半分が残っている。これは藤原麻呂の家政機関の食料支給の木簡（73はその一例）の日付と署名部分の一部の可能性が高く、食料支給の木簡を題籤軸に二次的に加工したものであることがわかる。これは皇后宮の活動と藤原麻呂の家政機関の活動の接点となる大事な木簡である。



(×0.7) 74s



(×0.7) 73N

傳書ふ具地  
一應  
春公  
世此  
長  
筆  
上  
書  
本

75N

兼  
炭  
一  
龍  
有  
物  
今  
意  
要  
原  
神  
付  
使

兼  
炭  
一  
龍  
有  
物  
今  
意  
要  
原  
神  
付  
使

76N

兼  
炭  
一  
龍  
有  
物  
今  
意  
要  
原  
神  
付  
使

同筆の文書木簡

75と76は、闊達な筆致で書かれた二条大路木簡の粹ともいえる文書木簡。藁や荒炭の借用を依頼するもの。同じ大友真君という人物の手になる同筆の木簡で、古代の木簡には珍しい流麗な行書で記される。「一応「牒」の書式で書こう」と意識はしているが、相手に伝えたい意志が先行して、融通無碍な書式がとられている。

# 宮廷の華麗な食材

全国各地から届けられた多種多様な荷札。二条大路木簡は当時の最高級の食材の宝庫である。中でも、伊豆・駿河のカツオ、安房のアワビの荷札は、二条大路木簡の発見により一挙に増加した。それまで一点しかなかった蘇の荷札が四点もまとめて見つかったことも、天皇・皇后の周辺の遺物であることを如実に示す。

35はアワビの鮓、45は塩漬けのアユの付札。これらも貢進の際の荷札の可能性がある。38は伯耆国屈賀（現在の鳥取県湯梨浜町）からの産地限定のワカメの鮓の荷札。43は出雲国からのアユの煮干しの鮓の荷札。36は駿河国からの調の荒堅魚（カツオの荒干し）の荷札。47は安房国からの調のアワビの荷札。39は瓜、柿、梨、茄子の四種類の野菜と果物の値段が書かれた木簡。瓜は大小区別した上で個数で数えているが、他はいずれもかさで計算している。下段枠内は、蘇の荷札。右から、美濃、上総、武蔵、参河国からのもの。武蔵のもの裏面には、天平七年の年紀がある。



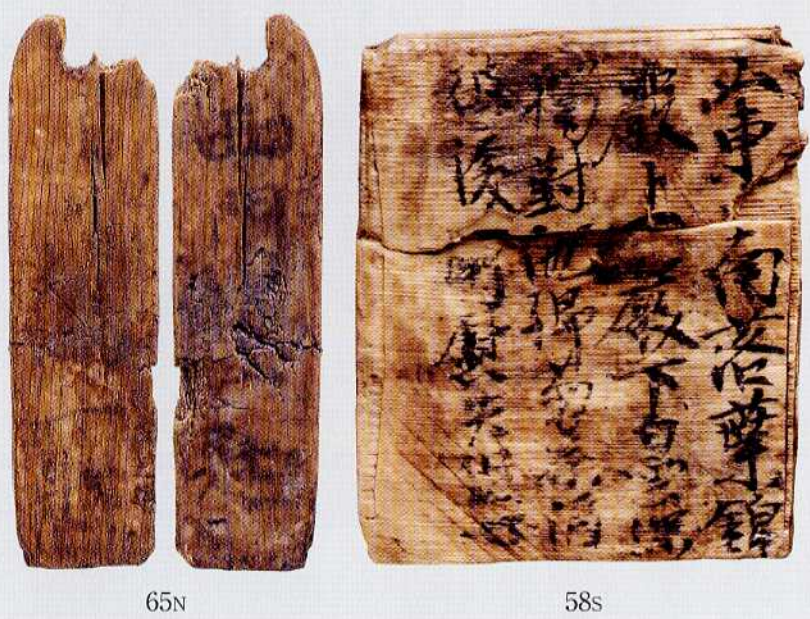


# 広がる木簡の世界



49と65は、キーホルダー木簡。一般に鑰(鑑)は、くるるカギ(扉の門を外側から引つ掛けて外すカギ)、匙(匙)は海老錠の牡錠を指すが、65では「匙」を鑰の単位に用いている。鑰が牡錠を指す場合もあったことになる。58は七言絶句を記す。出典の有無は不詳。70と63は用途未詳の算木状の木簡。64は口分田の売買文書の下書きか。51・59・67は題籤軸の題籤部分の断片。51は調度品の収納記録、59は食料の支給記録、67は荒炭と和炭の使用記録で、日付は作成開始日を示す。

文書、荷札ばかりが木簡ではない。キーホルダーや、文書の軸・箱など、木製品に墨書したのも立派な木簡である。漢詩や和歌を書いたり、文字の練習をしたりと、書く内容もさまざまで、中には用途がわからない木簡もある。木簡の世界の広がりとはとどまるところがない。

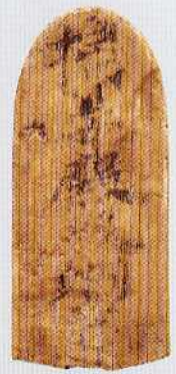




(×0.7)



53N



51N



59N



67N

53は、伊勢国司の少目大倭生羽しょうもくおほにっぽうが藤原麻呂に  
進上した文書の箱の蓋。棒状の軸に文書を巻き、  
文書箱に収めて進上するのが公文を届ける正式  
な作法。木口に「伊勢国天平八年封戸調庸帳」  
と書かれた木筒も見つかっており、この文書箱  
に収めて届けられた文書の軸と思われる。受け  
取った麻呂の家政機関で余白に多数の習書や絵  
を描いてから廃棄している。阿刀飯主は麻呂の  
資人で、習書した本人かも知れない。



呪願當解時宜龍備習布施持戒忍辱精進  
禪定智慧憂悲苦樂宜知是時及以非時不  
得妄說

雜寶藏經卷第五

皇后藤原氏光明子奉為

尊考贈正一位太政大臣府君尊尊姓贈  
從一位橘公太夫人敬寫一切經論及  
律莊嚴既了伏願速斯勝回奉寶寶  
助永庇菩提之樹長遊般若之津又  
願上奉 聖朝恒逢福壽下及黎  
采於盡忠節又光明子自茲誓言私  
濟沉淪勤除煩惱以窮諸法早契  
菩提乃至得燈無窮流布天下開名  
持衆獲福消災一切迷方會歸覺路

天平二年春日記

光明皇后一周忌の地、阿彌陀淨土院の立石（上）と光明皇后願經五月一日經の願文（石山寺藏）（下）

2009年10月20日

發行

独立行政法人 国立文化財機構  
奈良文化財研究所

〒630-8577

奈良市二条町2-9-1

<http://www.nabunken.jp/>